

# 高い生産性のうえに築く地域循環型養豚の取組み

## —株式会社大商金山牧場 米の娘ファームの取組み—

理事研究員 北原克彦

### 1 養豚の生産ピラミッド

養豚の特徴は、繁殖能力の改良が進みつつある畜種で、豚のライフサイクルに合わせた飼養技術のほか、防疫・衛生面の重要性が高く、畜舎レイアウトを考慮した多額な投資が必要な設備産業だ。豚肉サプライチェーンの川上に位置し、定時定量で安定供給するために、高い衛生水準と斉一性を実現した合理的管理も必要だ。

この養豚を立体的な観点からみると、農場の基礎は良い種豚であり、どのような種豚を選択するかが重要だ。その土台のうえに、防疫・衛生管理・飼料といった面から豚にとって良い仕組み・設備を構築する。さらに、その良い仕組みを活用した、人による豚の良い管理や、人にやさしい経営・労務管理が上位に位置する。このような生産ピラミッドを構築することで高い生産性が実現できる(第1図)。

近年の生産コストの上昇は、より高い生産性の実現を生産者に求めるとともに、地域循

第1図 養豚の生産ピラミッド概念



資料 筆者作成

環による飼料原料・堆肥の有効活用は、経営の持続性を高める可能性がある。

以下では、株式会社大商金山牧場が運営する米の娘ファーム(山形県金山町)による地域循環型養豚の取組みを紹介する。

### 2 米の娘ファームの取組み

#### (1) 経営概要・沿革

株式会社大商金山牧場は1979年に山形県庄内地方の食肉卸として創業。豚肉加工へ事業拡大後、08年に養豚場を開設、翌年から「米の娘ぶた」ブランドで販売開始。10年には「米の娘ぶた」が食肉産業展で最優秀賞を受賞した。現在は社員60人による年間10万頭(350頭/日)の枝肉処理能力を有し、養豚・食肉処理・加工・販売まで一貫したサプライチェーンを形成している。

米の娘ファーム(以下同社)は、1サイト・従業員17人で運営。海外ハイブリッド種豚のハイポーを利用し、母豚580頭によるウイークリーシステム生産を行っている。母豚1頭当たりの年間出荷枝肉重量は2,000kgを超えている。

#### (2) 候補豚管理

同社では1母豚当たり年間離乳頭数は30頭を超過しており、種豚ハイポーのベンチマーク(国内)では3年連続で繁殖成績トップを実現している。この高い生産性を実現する基盤が良い種豚だ。

GP(grand parent stock)を購入して自社で

PS(parent stock)を育成しているが、母豚にしていく候補豚の初回種付けは270日齢と十分に成熟させてから行っている。

国内の養豚場では、初回種付けを240～260日齢で行うケースが多いうえに、繁殖プロセスでは、発情管理・人工授精・毎朝の分娩介助など、多忙を極めるので、候補豚管理はおろそかになりがちだ。

同社は多産系種豚の体への負荷を考慮し、高い生産性の土台として種豚の体づくりを重視している。

### (3) 地域循環型養豚の取組み

飼料はチーズ製造の副産物であるホエイと地元の飼料米を活用した、リキッドフィーディングを活用している。

また、糞尿処理は、連続式活性汚泥法による汚水浄化とコンポストによる堆肥製造のほか、メタン発酵によるバイオガス発電にも取り組んでいる。豚ふん・地域の廃棄野菜くず・飲料製造の食品残さを原料とし、発電能力は年間400万KWhだ。発酵液は液肥として金山町特産であるニラ向けに供給している。さらに同社では餃子製造の原料にそのニラを仕入れており、養豚を軸に地域の産業循環を実現している。

### (4) 従業員指導

過疎化のなかで地元新卒採用は厳しい状況であり、17人の従業員のなかには秋田・新潟出身者と外国人技能実習生も含む。月1回は従業員と面談を行うほか、若い従業員への教育指導は、課長・主任の中間管理職を通して丁寧にコミュニケーションを取っている。

飼養管理頭数に対し従業員数はやや多い



(写真提供 株式会社大商金山牧場)

が、高い衛生水準の確保と豚の丁寧な管理には、従業員の定着と相応の人数が必要だ。

奥羽山系からの良質な水脈の恵みを生かし、おいしい豚肉を創り出すには、多産系種豚の十分な体づくりと、理想の農場を共に目指していく従業員が必要だと、白幡啓示畜産部部長兼執行役員は語る。

### 3 コスト高騰下の方向性

家計消費における消費者の国産豚肉志向によって、これまで豚肉市況は比較的高い水準で推移してきた。しかし、現下のインフレは、実質賃金低下を招き、消費者は節約志向を強めている。量販店店頭では、より安価な冷凍輸入豚肉のスペースも広がってきた。

養豚における対応の基本は、生産性の向上により低コストでおいしい豚肉を生産することだ。同社は、食肉サプライチェーンの畜産・食肉処理・流通が一体になって、地域資源の循環とたんぱく源の安定供給という社会的責務を果たしている。このような取組みが、広く消費者に伝わることを期待したい。

(きたはら かつひこ)